

アートを探求

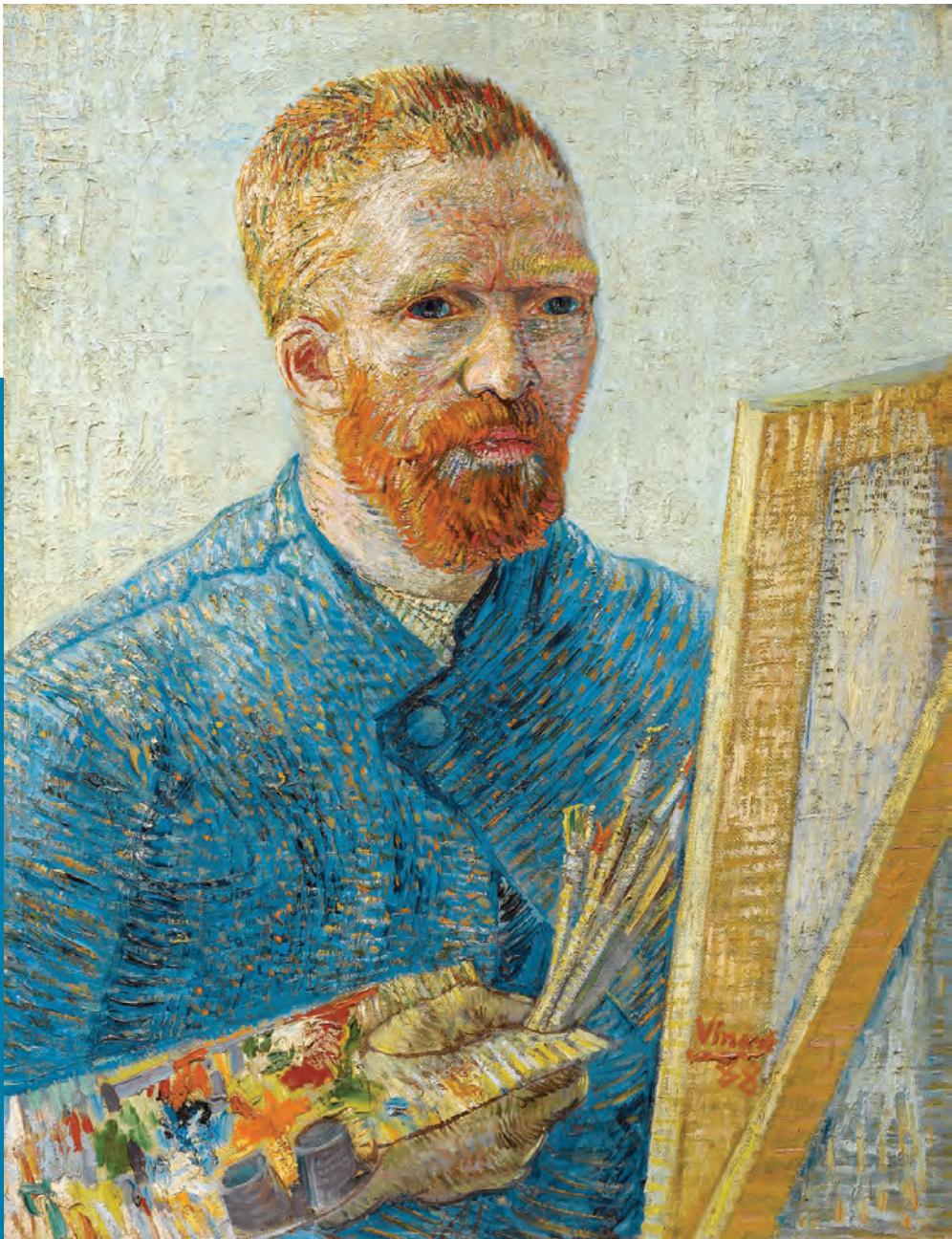
AAC Journal

AICHI
ARTS
CENTER

by 愛知芸術文化センター

2025 WINTER
Vol. 126

家族がつないだ画家の夢



ファン・ファン・ゴッホ《画家としての自画像》 1887年12月-1888年2月 ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム（ファン・ゴッホ財団） Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

2026年1月3日(土)～3月23日(月)

NHK名古屋 放送100年記念

中日新聞社創業140年記念

ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢

場所／愛知県美術館 時間／10:00～18:00 ※金曜～20:00(入場は閉館の30分前まで)

休館日／1月5日(月)、1月19日(月)、2月2日(月)、2月16日(月)、3月2日(月)、3月16日(月)

料金／一般2,000円(1,800円)、高校・大学生1,300円(1,100円)、中学生以下無料

※()内は通常前売料金です。団体料金はありません。

※上記料金で本展会期中に限りコレクション展もご覧になれます。

お得な限定チケットも販売中
詳細は展覧会公式サイトで！



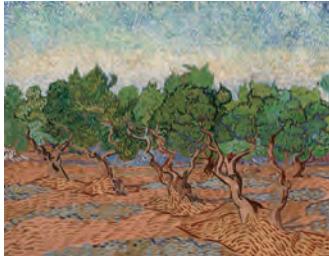
ゴッホ展

ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢
フル・オーケストラを凌駕するほどの演奏を5台ピアノで
虚ろな陶造形に身体性を見出す西條茜
劇場とダンス 日常にささやかなダンスとの出会いを

抨啓、星になった兄さん

フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)の作品は、今日までどのように伝えられてきたのでしょうか。本展は、ファン・ゴッホ家が受け継いでいたファミリー・コレクションに焦点を当てます。

フィンセントの画業を支え、その大部分の作品を保管していた弟テオ。兄の死の半年後にテオも亡くなると、その妻ヨーは膨大なコレクションを管理し、義兄の作品を世に出すことに人生を捧げます。テオとヨーの息子フィンセント・ウィレムは、コレクションの散逸を防ぐためにフィンセント・ファン・ゴッホ財団を設立し、ファン・ゴッホ美術館の開館(1973年)に尽力します。人びとの心を癒す絵画に憧れ、100年後の人びとにも自らの絵が見られることを期待した画家の夢も、数々の作品とともにこうして今日まで引き継がれてきました。本展をとおして、家族が受け継いでいた画家の作品と夢を、さらに後世へと伝えていきます。



左、フィンセント・ファン・ゴッホ《羊毛を刈る人(ミレーによる)》1889年9月
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)
右、フィンセント・ファン・ゴッホ《オリーブ園》1889年11月
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

ART LIBRARY

ヨー・ファン・ゴッホ＝ボンゲル
画家ゴッホを世界に広めた女性

ハンス・ライテン／著、川副智子／訳 NHK出版、2025.6

ゴッホの義妹・ヨー・ファン・ゴッホ＝ボンゲルの功績と生涯を描いた評伝。フィンセントの作品管理及び普及に尽力した彼女の道のりや背景を、貴重な資料・図版とともに全18章でたどる。

石崎学芸員

フル・オーケストラを凌駕するほどの演奏を5台ピアノで

新潟、三重で人気を博した重厚な音と美しく繊細な音色を奏でるコンサートが愛知県芸術劇場コンサートホールに登場します。舞台上にはスタインウェイ2台、ベーゼンドルファー1台、ヤマハ2台のピアノが並び、その姿はまさに圧巻！タイトルにある「ツィルクス」とはドイツ語でサーカスの意。白石光隆、田村緑、中川賢一、デュエットウ かなえ&ゆかりの5人のピアニストによる50本の指が鍵盤上を激しく躍動し、披露される超絶技巧はまさにサーカスのようです。5台のピアノならではの多彩で個性豊かな響きがホール全体を包み込みます。

[曲目]

- G.ホルスト(駒井一輝 編):木星
- C.ドビュッシー(加藤昌則 編):月の光(5台ピアノver.)
- 加藤昌則 編:ジョン・ウリアムズ・メドレー
- G.ガーシュwin(駒井一輝 編):ラブソディ・イン・ブルー ほか

[出演]



白石光隆 © Shouhei Yokoyama 田村緑 © Shigeto Imura 中川賢一 © Shuhei NEZU デュエットウ ゆかり デュエットウ かなえ



2026年3月7日(土)

ピアノ・ツィルクス～5台ピアノの世界 in 愛知県芸術劇場

場所／愛知県芸術劇場コンサートホール

時間／15:00～

料金／一般4,800円、[U25]2,500円

チケット／発売中

※[U25]は公演日に25歳以下対象(要証明書)。

※未就学児入場不可。

※「劇場と子ども7万人プロジェクト」

(小・中・高校生招待)対象公演。

詳細は
劇場WEBページで！



劇場

連携と変容、可視化される力の美しさ

自らが高い身体能力を備えたダンサーである三東瑠璃は、振付においても他に類を見ない身体の美学を打ち出している。4月に愛知県芸術劇場ダンスアーティストに就任以来、最初に手掛けた創作がパフォーミングアーツ・セレクション2025 フェスティバルエディションで発表された。三東ならではの世界観を凝縮した、美しく洞察に富んだ作品だ。

客席が地続きに設置された大リハーサル室のフロアの中央に、人の身体が絡み合った、ひと固まりの立体物がある。誰のものか分からぬ腕や足が複雑に入り組んだ固まりは、気が付くとわずかに動いていて、呼吸や脈動を湛えた生ある存在であることが分かる。やがて固まりは氷が溶けるようにゆっくりと、あるいは地層が動くような目に見えない速度で解れていき、密着していた4人のダンサーの姿が現れる。間近に見る身体のあり様が強く迫る上演だ。

密着が解けた後も4人は接触を保ったまま形態を変えていく。連携の外へ出て行こうとする身体があると、身体間に生じる張力がそれを引き留める。あるいは床に沈んでいく身体を他の3人が支え、引き上げる。ひねり、よじれ、大きな可動域で動くダンサーたちと、互いの間にはたらく身体のレジリエンス(回復力)。4人の連携が見えない力を可視化しながら、刻々と変容していく過程は美しい。ステップによる通常のダンスの概念とも、身体を物質と見做す立場とも異なる独自の作舞の方法により、見たことのない地平を切り拓くパフォーマンスに目を見張らされる。

4人はしばしば目を閉じて、満ちてくる感情やエネルギーの流れを受け止める。展開に筋書きはなく、瞬間ごとに

心を揺さぶり、思考が巡る、その場でしか味わうことのできないもの。

選び取った動きが次の動きを生んでいくが、それを可能にしているのは互いへの信頼と、他の存在に対する全幅の肯定だろう。重力との関係、互いの身体の重さや温もり、内的なぎわめきを瞬間ごとに感知しながら、定点のない関係性を生きるダンサーたちは、未知の時間に身を投じながら、同時に、より根源的な生の位相を生きている。

鍵盤楽器、クラヴィコードが繊細な音色を奏で、上演に伴走する(内田輝、演奏も)。コードのある音楽が不定形な身体の営みを意味あるものにしている。

竹田 真理さん Mari Takeda

コンテンポラリーダンスを中心に取材執筆するダンス批評家。関西を拠点とし、愛知県芸術劇場のダンス・プログラムにも足繁く鑑賞に訪れている。



© HATORI Naoshi

愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohama×メニコン シアター Aoi
パフォーミングアーツ・セレクション2025
Festival Edition 三東瑠璃『満ちる』
2025年10月30日(木) 場所／愛知県芸術劇場大リハーサル室

鑑賞

note

丁寧な言葉で残されたレビューを読み深めて楽しみたい。

栖鳳と名古屋に引かれた確かな補助線

近代日本画を語る上で欠かせない竹内栖鳳、その画業を時系列に辿りながら「高島屋と栖鳳」「名古屋と栖鳳」「人物画への挑戦」「越前和紙と栖鳳」というトピックを挿入する構成。副題にあるトップランナーとしての軌跡を名品で押さえつつ、作品に留まらない画家の多様な側面をトピックによって拾い上げていく。鑑賞性の高さは勿論、トピックによる視点の拡張により、名品展に留まらない知的好奇心を刺激される展示であった。

特に「名古屋と栖鳳」は、明治32年(1899)に愛知県で開催された全国絵画共進会出品作《秋風入林》(昭和美術館蔵)の来歴を丁寧に説く、本展が愛知県で開催されるべき意義を感じるトピックであった。後期展示では大正7年(1918)の第10回東海美術協会展に参考出品された第2回文展入選作《飼われたる猿と兎》(東京国立近代美術館蔵、明治41年[1908])も並置され、来館者は約100年前の名古屋の人たちが実見した作品を、同じ土地で追体験的に鑑賞できる。名古屋の日本画は、後述の石川英鳳ら京都市立絵画専門学校の卒業生たちが帰郷した大正時代後期に急速な近代化を迎えるが、その前提となる土壤として、栖鳳ら京都画壇の画家たちとの継続的な交流や、作品の受容があったことを実感させる。

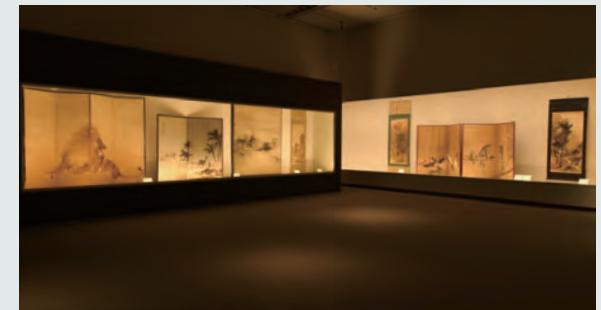
また、「越前和紙と栖鳳」のトピックでは、栖鳳の使用した画紙「栖鳳紙」の開発に際しての越前和紙漉き職人・初代岩野平三郎との関係が取り上げられる。本トピックでも間接的な栖鳳と名古屋の関わりが見て取れる。本展では名古屋の日本画家・石川英鳳が昭和3年(1928)に四尺七寸×二尺二寸(約142×66cm)の栖鳳紙を30枚注文

美術館

したとの書簡(福井県立美術館蔵)が展示されている。同年に英鳳は久邇宮邸天井画2点を描いているが、同邸の装飾には平三郎の関与が知られる。本書簡が天井画制作のための発注のものは判然としないが、現在確認されている英鳳の戦前の軸物には紙本のものが少なくない。これらの作品の料紙が仮に栖鳳紙であれば、当代人気画家であった英鳳の栖鳳紙を用いた作品が、名古屋を中心広く受容されていたことになる。そうした観点からも、栖鳳と名古屋に補助線を引いた本展の意義は極めて大きいのではないか。

近藤 将人さん Masato Kondo

名古屋市美術館学芸員。担当の常設企画展「近代名古屋の日本画界」は2025年12月7日(日)まで開催。



近代日本画のトップランナー 竹内栖鳳

2025年7月4日(金)~8月17日(日) 場所／愛知県美術館

AACのWEBサイト・SNS・
音声メディアでは
音声気軽に楽しめる
芸術を楽しむ
コンテンツを配信!

AACタイム

by 愛知芸術文化センター

こここのあゆつ /
AACタイム

WEBサイトを
チェック /
Instagramを
フォロー /
Podキャスト
を聞く /
愛知芸術文化センターの
アートがもっと好きになるラジオ

クリスマスのオルガンコンサートを 愛知県芸術劇場オルガニストが紹介

愛知県芸術劇場オルガニスト
都築由理江

今年の「クリスマスはオルガンだ！」は、長年、東京芸術劇場オルガニストとして日本のオルガン界を牽引してこられた小林英之さんにご出演いただきます。本場ヨーロッパのクリスマスを彷彿とさせる厳かな雰囲気を、当劇場のオルガンをフルスペックに活用できる近現代の作品を中心にお届けします。共演はルーテル学院大学講師で同大学オルガニストを務める湯口依子さんです。12月24日(水)・25日(木)は、みなさまと一緒に劇場で過ごせますように。

クリスマスはオルガンだ！2025 ~オルガン・アンサンブルで聴くパイプオルガンの響き~
2025年12月24日(水)19:00~・25日(木)15:00~ 場所／愛知県芸術劇場コンサートホール

詳細は
劇場
WEBページで!

お知らせ Letter

詳細は
愛知県美術館
WEBページで！



2月から豊橋市美術博物館で開催!

愛知県美術館・愛知県陶磁美術館 移動美術館

愛知県美術館と愛知県陶磁美術館は、より多くの県民のみなさまにコレクションをご覧いただくため、県内各地に作品を運んで「移動美術館」を毎年開催しています。豊橋市で行う今回は、「クロスボーダー：越境する美術」をテーマに、アメデオ・モディリアーニや藤田嗣治、エミール・ガレなど、国内外の絵画や陶磁器を中心に約60点を展示します。人や物の「越境」に着目して、美術と工芸の歴史をたどる展覧会です。会期中には記念講演会やギャラリートークも行います。ぜひ会場へお越しください。



街に出向き、劇場に足を運んでもらう、
コミュニケーションができる劇場へ

すごく簡単に言うとコンテンポラリーダンスを普及させるミッションを私は託されています。できることは何か、どのように価値を提示できるか、この約三年間、試行錯誤してきたと思います。まつもと市民芸術館は、新たに三人体制になるまでは俳優・演出家の串田和美さんが芸術監督を務められたことで、非常に街に演劇が根付いています。そこに突然、何のゆかりもない私がダンスを背負ってやって来たわけですから、街の方々はなんのことやら…だったと思います。この世界に居るとコンテンポラリーダンスの客層があるようになりますが、松本にはそんな幻想はありません。

得体の知れない自分が、劇場でじっと待っていて「見に来てね」ということには無理があると感じ、こちらから出会いに行こうと考え、街を知るには、とりあえず飲食店かと。喫茶店や、居酒屋などに行つてお店の方

呼んだタンサーの踊りがここに住む誰かの一踊三つみ
よう」につながったと思うと、胸が熱くなりました。そして、その想いを受け止める場がここにはある。このようなささやかなつながりに、私は希望を感じています。「ンテンポラリーダンスが地方で急に盛り上がる」ということは、私はないと思っています。でも、こうして小さな点が街の方々の力を借り、少しずつ広がっていく気配を感じています。もちろん、話題の作品を観ていただこうとも公共ホールの大切な仕事です。ただ、今出来ることは、人と人が出会うように、お客様と一緒にダンスと出逢ってもらう機会を作ることだと思っています。気が合って仲良くなても良いし、よくわからないけど面白い人は、人との人が出会うように、お客様と一緒にダンスを紹介したい。「こんな面白い人がいるよ!」と。実は、芸術監督に就任した時から、私は少年刑務所にクラブ活動の先生として月に一度通っています。ふと

スタッフのオススメのダンスの本！ **ART LIBRARY**

ダンスの歴史 ヴィジュアル版
宮廷ダンスからブレイキンまで

ロバート・ヒルトン／著、高尾葉つこ／訳
原書房、2023

人々がさまざまなかたちで展開してきたダンスについて、特に変容過程にフォーカスし読み解いた書籍。豊富な図版とともに、カドリールから今日のヒップ・ホップまで、幅広く見渡すことができる。

愛知芸術文化センター管理課 アートライブラリー担当
三上昂良

navigator's COLUMN

国際芸術祭「あいち2025」の
キュレーター・スタッフが
アートの多様性を「あいち」から発信します

11月30日(日)をもって、国際芸術祭「あいち2025」が閉幕しました。みなさんお楽しみいただけましたでしょうか？あらゆる差別や優生思想を許容しないというステートメントの発信や、クラブイベントやナイトミュージアムの実施、漫画家によるキービジュアルなど、「あいち2025」ならではの要素も盛りだくさんでした。また、まち歩きも含めてさまざまなかたちで「せともの」のルーツに触れられたのではないですか？次回は2028年、どんな芸術祭になるか、楽しみにお待ちください！

ダントン入場と

日常に
ささやかな
ダンスとの出会いを



Midori Kurata
倉田翠 演出家 / ダンサー / akakilike主宰 /
まつもと市民芸術館芸術監督(舞踊部門)
1987年三重県生まれ。京都を拠点に、演出家・振付家・ダンサーとして活動。自身や他者と向かい合い、そこに生じる事象を舞台構造を使ってフィクションとして立ち上がらせることで「ダンス」の可能性を探求している。
第23回AAF戯曲賞二次・最終審査員。



MORE DANCE



INTERVIEW

生きているような陶造形

西 作品は主に床の間や台の上に置かれることが多いですね。決まりきった展示方法に対しても疑問がある、もっと新しい見せ方ができないかなと。それから、重力のことも考えました。やきものの場合、重力を使って生まれるかたちがあるて、釉薬の流れもそうです。重さのある作品が吊るされて紐がびーんと張つていると、緊張感があるし、重力を感じたり意識したりする。いつものやきものとは違う見え方になるのではないでしょか。

入 吊るすことで質量を感じさせながら、独特の浮遊感があります。

西 父親が医療関係の仕事をしていたこともあって、人間の身体のかたちや臓器などには、小さな頃から興味を持つていました。そこから作品に身体的なイメージを持たせるようになつたのですが、それが吊るされていることで、身動きのできなさというか、不自由さみたいなことを感じる要素が生まれると思うて。自分の体なんだけど自分の体じゃない、自分が効かないみたいしたことって多々あるような気がしています。自分でもそう感じるし、そういう体験も含めて吊るすと自由展示方法になつたのだと思います。



入　国際芸術祭「あいち2025」では、国内有数のやきもの産地としての歴史がある瀬戸の愛知県陶磁美術館で《シーサュボスの柘榴》^{かくろ}を展示しました。作品を通して表現されたことは何ですか。

西　今日は瀬戸でリサーチをしてから、リアリティを持つて作れました。歴史などを調べていく中で、「ここは労働者の町だ」という印象を強く持ちました。かつて鉱山では人の手で土を掘って運び、成型して窯に入れて焼き、窯から出して売りに行くところで、途方もない労働があったんだろうなと……。しかも、それを女性も

らと思いました。ただ、国際芸術祭「あいち2021」のテーマ「灰と薔薇のあいまい」は、人間中心の視点ではなく、地質学的な時間軸で世界を考察することを呼びかけていますよね。人間が労働するようになつたのは、地球規模で考えたらすごく短い期間のことなのに、環境に大きな影響を与えてしまったとも考えられます。瀬戸でのリサーチで、やきものの原料になる陶土もどんどん少なくなつていいという話を聞いて、自分の表現をあと何年続けられるのだろうと自覚的になり、考えるきっかけをいただきました。

うつ 虚ろな陶造形に 身体性を見出す



《シーシュボスの柘榴》2025年
インタビューは国際芸術祭「あいち2025」愛知県
陶磁美術館会場にて(11月20日[日]に終了)

西條茜



すべて《シーシュボスの柘榴》2025年

加へてやっていた。私も普段20kgくらいある粘土を荷造り用ロープのイメージです。瀬戸を拠点に活動した洋画家・北川民次が描いた労働者の絵もすこいいんです。民次の絵にはよくザクロが出てくるのですが、民次のアトリエにも実際にザクロの木が植わっていました。ザクロには多産や繁栄といった意味があつて、瀬戸は大量生産のやきもので繁栄してきた町であることとメタファーのように重なって、心臓とザクロの木をモチーフにした作品を展示の中心に。陶土が採れる山々や燃料になる薪の束、窯の煙突が連なった風景など、やきものの町の複合的なイメージからいくつもの作品が生まれました。労働者の動きとか、ものや人が移動していく軌跡を残したいという思いを込め、床には絨毯を敷き詰めて、実際に作品を動かした跡が会場に残るように